

エッセイ

# 人はなぜ働くのか

——古今東西の思想から学ぶ

橋木 俊詔

(同志社大学教授)

ワーク・ライフ・バランスは現代における働き方において、きわめて適切な考え方である。働き過ぎるのでもなく、そして人生を有意義に送るのはよいことであるが、なぜ人間は働くのかを知っておくことは、ワーク・ライフ・バランスを推進するために必要である。人はなぜ働くかという問題は、人間にとって永遠の課題であるかもしれない。できれば働かなくて食べていける人生を送りたいと願う人は多いが、大半の人は働かざるをえないのが現状である。新古典派経済学では、効率よく働き、かつ生産性を高める方策を考えた。伝統的なマルクス主義では「働かざる者食うべからず」の思想が主流でさえあった。古今東西の哲人、そして思想家・経済学者が働くということはどう理解してきたかを論じて、読者の方々への参考としたい。

## I ヨーロッパにおける労働観

### 1 古代ギリシャ——労働は奴隷のすること

古代ギリシャの哲人たちは、労働は卑しく、呪いに満ちたものと見なしていたので、自由な市民は労働しないことを徳と考えていた。市民は大土地所有者のように働かなくても生活できる人であり、古代の制度はそれを前提としていた。労働をするのは奴隷だけであり、農業、手工業などの担い手はこれらの人であった。言わば市民対奴隷の身分社会だったわけで、現代とは異なる経済基盤が、異なった労働観を生んだのであった。

なぜ労働が呪いと見なされていたかと言えば、世の中から呪われた人々、すなわち戦争に負けた人や異国人、それに奴隷のみが労働に従事すべきと考えた。支配者たる自由な市民は労働せずに、その人たちの労働による成果を食べたり、財として消費したのである。

古代ギリシャ人のこのような市民と奴隷の区別は、かの哲人アリストテレスも容認していた。す

なわち、『政治学』の中で、労働から解放された市民だけが、思考の自由を保持することができるとした。特に耕作や物を作る作業は肉体労働の典型なので、肉体労働をすれば思索の余裕など持てるはずがなく、市民はそれに従事すべきでないとした。

### 2 キリスト教と労働

中世に入り、キリスト教の思想による影響力を強く受けるようになると、新たな労働観がもたらされることとなる。中世のキリスト教はその教義として禁欲主義を旨としていたので、このことが人の労働観を変えたのである。すなわち、肉体労働を非難した古代ギリシャの哲人の考え方に対して、中世の神学者は批判の眼を向け、生活に必要なものを得るために働くことは貴重なことである、と主張するようになった。神への祈りと、生きていくために働くこと、この2つを人生の尊い行い、と見なしたのである。

それを典型的に説明するのが、聖ベネディクトによって建てられたモンテ・カッシーノの修道院

の意味である。この修道院は自給自足を実践するために、農地、ワイン畑、工場などを自分で持っていたし、そこで修道僧たちは生活に必要なものを作るために働いていたのである。

聖ベネディクト派の修道僧の労働実践は、一般の人にも流布するようになり、森林を開墾して新しい農地を作り、農地を耕して農作物を作り、工場 で日用品などを作り、それを売買する商取引の開始となった。これが中世の生産活動、商業活動を促した。重要なことは、働くこと、すなわち仕事の意義と倫理を認識するようになったことである。

### 3 近代的労働観の萌芽

12世紀から13世紀にかけて、仕事の倫理は一層の高揚を見せるようになった。すなわち、世に存在する様々な職業に関して、貴賤の差があることを認めるようになったこと、肉体労働を肯定するようになったこと、勤労によって得る報酬を正当化するようになったこと、などである。現代の職業観に相通じるものがあるし、資本主義の誕生のごく初期の兆しがうかがえるのである。

14世紀から17世紀にかけてヨーロッパ域内、そして外国との貿易が盛んとなり、一部の富裕層が出現することとなった。ルネッサンス時代に入り、美術や音楽の芸術が創造され、例えばフィレンツェの興隆があった。これら富裕層は優れた芸術家や文人を抱え込み、世に名作とされる芸術品、文芸作品を多く生んだことは有名である。

### 4 宗教改革——プロテスタント的労働観

中世におけるキリスト教の修道院的な労働観は、宗教改革によって大きく変化した。それはマルティン・ルターとジャン・カルヴァンが中心となってカソリックの教義と慣習を批判し、プロテスタントの教義を新しく創設したことによる。宗教改革における労働観に関することを述べてみよう。

16世紀のヨーロッパは困り込み運動の結果、農民は土地を失い、仕事の見つけられなかった人は失業者、あるいは浮浪者となった。特に都会において農業地から移ったこれらの貧困者が多数を

占めるようになった。これらの貧困者や浮浪者の増加は、働くことを望まない人が増加した結果によって生じたものである、と多くの宗教家が考えたのである。すなわち、当時の宗教指導者は、貧困は仕事の不足によって生じるということに求めず、人々の怠惰にその理由を求めた。貧困者や浮浪者は働く意欲に欠ける人であり、宗教の見地からそれらの人を非道徳的な人として糾弾したのである。

しかしながら、このようなルターやカルヴァンによる非難の背後には、勤勉な人への賛美が含まれていることを強調しておこう。プロテスタントイズムによる勤勉と儉約の賛美は後にマックス・ウェーバーによってなされるが、ルターやカルヴァンの宗教改革はその萌芽としての意義があると解釈したい。そして後の経済学の登場は、貧困者や浮浪者の出現をその人たちの怠慢に求めず、世の中に仕事の数が不足するからだ、と説明するようになった。

ところで、当時の宗教の見地からすれば、浮浪者や貧困者が増加したことは社会にとって罪と見なされた。これら貧民を道徳的に矯正するためには、それらの人を一カ所に集めて収容することが必要と判断された。イギリスやオランダではそれらの場所はワークハウスと呼ばれた。その収容所では貧民を懲罰の意味で労働させるとともに、そこで仕事を覚えることによって収容所退出後は、市民として働くことが可能になった。

### 5 市民革命～産業革命期

絶対王制は市民革命などによって崩壊し、いわゆるブルジョワジー（市民階級）が支配階級となる。同時に産業の興隆によって産業資本家が登場して、人々にいかに労働者として工場でもらうかが、社会の要請となる。働くことが倫理として重要なことであると、労働者に自覚してもらうことが要請される時代となった。

これを可能にしたのが、後の20世紀初頭、マックス・ウェーバー（1989）による『プロテスタントイズムの倫理と資本主義の精神』の解釈である。この思想はあまりにも有名なので、多くを語る必要がない。

キリスト教におけるルターやカルヴァン、特にカルヴァンの禁欲生活の倫理と勤勉の倫理が資本主義の発展に寄与したのである。有能な労働者として育つには、労働倫理が必要である。すべての職業が「聖職 (calling)」と見なされたことによっても、勤勉の労働倫理が付与されたことがわかる。さらに「聖職」とされたことによって、強制的な禁欲生活も必要であるとの認識も高まったのである。

絶対王制時代におけるワークハウス、ないし労働収容所での強制労働の仕組みが、ブルジョワジーや産業資本家という支配階級の先導による労働者の強制労働を促すというメカニズムを生み、プロテスタンティズムの倫理を媒介としてうまく経済は進行したのであった。しかも、工場労働者の方も勤勉と禁欲の倫理が自分たちの生活を豊かにすることに気づいた。すなわち、労資が同じ価値を認識し、かつ共有することになったので、資本主義は発展することになる。

## 6 経済学の登場

産業革命の進展に応じて、人は工場やオフィスで労働者として働く機会が増加した。労働者をどのように雇用し、かつどのような賃金を払えばよいか、産業用の機械との関係をどうすればよいか、といった問題が経済学として考えられるようになった。さらに資本主義を発展させるためには、どのような経済のあり方や体制が望ましいか、ということも議論されるようになった。

その最初の金字塔が有名なアダム・スミスによる『国富論』(1776年)である。資本主義は政府が介入することなく、企業や労働者の自然な競争に任せておけばもっとも効率よく機能すると主張したし、分業体制の重要なことも説いた。この経済思想は古典派経済学と呼ばれたが、これがその後新古典派経済学として発展する。労働に関して言えば、アルフレッド・マーシャルが労働者は、技能を蓄えた熟練労働者と技能のない非熟練労働者の2つに区分されるとして、非熟練労働者に教育や訓練を施して、できるだけ熟練労働者の数を増加させる必要性を説いた。ここで考えられた経済学は、資本主義経済をどう理解し、どう運営す

ればよいか、ということを議論したのである。

## 7 職人芸の意義

労働は本来ならば苦痛を伴うものである。産業革命以降の工場労働は汚い職場環境の中で、肉体的にもきつい仕事が多いし、労働時間も長かった。さらに、仕事は単純作業が多いので、労働に疎外感が漂う可能性が高いし、なによりも賃金は低かった。本来は苦痛である労働が、どのようにして喜びに転換したのであろうか。

それは、職人芸の立場から労働を喜びと判断することである。ヨーロッパではウィリアム・モリスによる職人芸の賛美と、ジョン・ラスキンによる労働と知性の関係重視、すなわち労働を知性の発露の場と見なす考え方がある。後者はホワイト・カラー労働によりふさわしく当てはまり、前者はブルー・カラーの労働を喜びに転じるものである。

ここではモリスを主として論じてみよう。19世紀に職人、詩人、デザイナーとして活躍したモリスは、人が生産活動にあたるに際して、職人的な仕事に従事する価値を評価し、多くの人が自己の才能・技能を開花させるような仕事に就いて製品を生み出すことができれば、労働の喜びが感じられると主張した。中世における大工、職人の仕事を念頭においていたことは確実であり、これら職人は美しいものを生み出す満足感があったと信じたのであった。

## 8 マルクス主義による労働は人間の本质

次に、マルクス主義の労働観に通じるものであるが、「働かざるもの食うべからず」の格言に近いものから出発する。たしかに労働は苦痛を伴うことであるが、労働によって生活の糧を得るのであり、働かない者はそれを放棄することになるので、人間の本质から離れたものになるとして、労働を遺棄する人は人間性を失うと考えたのがマルクス主義である。

マルクス自身は労働者が資本家から搾取されていることに反旗を翻して、社会主義への変換を主張したのであり、必ずしも労働自体を否定することはなかった。それはマルクスに先がけて空想的

社会主義の思想として有名なサン＝シモンが、労働の神聖化を図り、労働は経済活動であるとともに道徳的な活動として評価できるとしたことによっても分かる。マルクス以前においても既に労働の価値を賞賛していたのである。

マルクス主義の思想は、資本をもつ資本家が労働者の生産する財を奪い取っているとか、安い労賃でしかも過酷な労働条件の下で働いている労働者を、資本家が搾取しているという事実を異を唱え、壮大な経済学を構築して、いわゆるマルクス経済学として大成したことはあまりにも有名である。マルクス以降、様々な後継者が出てきて、その後継者たちも労働までを否定することがほとんどなかったことは特筆されてよい。

ただし、これには例外もいた。マルクスの娘婿であるポール・ラファルグは『無為への権利』(1992)において、マルクス主義者でありながら人生における労働には喜びなどない、として労働を否定する主張を行った。多くの労働者と社会主義の信奉者が労働を賛美していることに反抗し、労働は苦しいものであるとの態度を取り続けたのである。彼にとっては自由な時間のあることが、もっとも人間性が豊かであると考えたのである。

ラファルグの主張に対する私のコメントは次のようなものである。働かずに自由な時間だけをもてるのは、大地主か大資本家に限られるのであり、マルクスの言うようにそれらの人に搾取されている小作人や労働者は、大地主や大資本家の真似はできない。むしろ、たとえ苦しくとも働くことによって食べるための糧を得て、働かない時間(すなわち余暇)をいかに楽しむか、ということに精励すべきではないか、ということを主張したい。大なり小なり労働は苦痛を伴うものである、と認識した方が自然である。

マルクス思想の話題に戻ろう。マルクス主義はロシア、東欧、中国、キューバ、等の国で花を咲かせたが、その後多くの国で社会主義国は崩壊することとなった。なぜ崩壊したのかと言えば、マルクス主義が労働を礼賛したこととは無関係な理由である。例えば、計画経済の不効率性、人々が自由を欲したこと、行き過ぎた平等主義が有能な人の勤労意欲を阻害した、等々の理由がある。マ

ルクス主義は労働を否定しなかったのであるから、社会主義国から資本主義の国に転換した国々において、労働観に変化が見られたという事実はない。

## II 東洋における労働観

### 1 「桃源郷」について

西洋では、できれば働くことのない理想郷をユートピア、ないしアルカディアと称して賞賛したが、中国でも有名な陶淵明の「桃源郷」がある。桃源郷は必ずしも働くこと自体を否定するのではなく、自然に逆らわぬ、例えば田園における自由な労働が楽園の条件だとされる。

中国で興味あることは、人は働くだけでなく、悠然と余暇を楽しむゆとりのあることが肝要とされる。また、田園では収穫物を税金などで奪うような「権力」も存在しないことが、桃源郷の条件である。特に後者の「権力」の否定は、現代においても興味ある点を提供している。なぜなら、お上の権力行使を否定する姿は、現代でも価値があるからである。

ところで、陶淵明の期待するようなことは、現実の世界において必ずしも満たされないことがある。例えば、天候不順や天災によって、すべての人が自給自足できないことが起こりうるが、そのときに収穫物を皆で分け合うことが必要となる可能性がある。このときは人々の間で収穫物に余裕のあるところから、不足するところに権力が移転する政策をとる。権力(お上)の存在も必要かもしれない。再分配は政府の仕事である。税金も必要かもしれない。

### 2 日本における労働観

日本では働くということに関して、仏教と儒教の影響力が強い。仏教が主たる宗教の日本なので仏教の影響力はよく分かる。儒教はどうだろうか。儒教はそれほど信仰の強さがないにもかかわらず、少なくとも精神的には日本人の心に奥深く根づいたものである。江戸幕府は林羅山による日本的な儒教である朱子学を用いて、武士による幕

藩体制の維持のためにその教義を重用した。後述する有名な石田梅岩は儒教の教えの影響があるし、経済学者である森嶋通夫も日本の経済発展の源泉の1つを、儒教に求めていることでわかる。

### (1) 仏教的労働観

長部日出雄はその著『仏教と資本主義』(2004)の中で、日本における最初の資本主義の先導者が行基であると主張している。行基は仏教の教義を教えるだけでなく、各地で貧民救済の事業を行っていた。それに加えて、お寺の造営、橋や堤防の建設、池を掘って水源を確保したりして、今でいう様々な土木事業を実行した。そこでは、あたかも資本主義の下で働く人の価値を賞賛するがごとく、働くことの意義を人々に会得させたのであった。正に人に役立つ仕事と労働を、「知識」として実感するように努め、そのことが人々からの信頼を集めていた。

真言宗を開いた空海も行基に習った方策、すなわち「知識」に基づいて、寺院、学校、堤防などを造った。人々がこれらの土木事業に進んで労働を提供したのは、空海の教えに賛同したからであり、人は他人のために働くという日本的な伝統のさきがけとなった。

禅宗の創始者でもある道元も『正法眼蔵』において、人は働くにあたって修行と作法が大切であるとした。厳しい修行と作法を教義とする禅宗ならではの観がある。さらに、強制ではなく、自由に他者に奉仕しうる仕事に従事することが、もっとも人間にとって至福なことと主張した。

このように述べてくると、日本の仏教においては、働くということは誰にも強制されることなく、自分の意志で進んで他人に役立つことをすること、ということになる。そして、その自由意志にもっとも重要な価値を置いているのではないかと想定できうる。現代風に言えば、ボランティア活動に専念することが、もっとも崇高な働き方であると解釈できるかもしれない。少なくとも報酬だけを求めることに目的をおいた働き方を、さほど評価しないのが日本の仏教からの教えである。

西洋の近代においては、無償の労働よりも有償の労働を自然なものみなして、賃金などを受領

することを正当な経済取引と考えたのと比較すると、日本はやや異なる思想をもっていた。

しかし、現実の社会に眼を転ずれば、日本ではボランティア活動はさほど多くの人がコミットしていない。無報酬で働いて、他人のためになることをする経済的な余裕が、今の多くの日本人にならなからなのか、それとも表面的には日本人の大半が仏教の信徒でありながら、仏教の教義に関心、無知、そして無反応であるからなのか、断定はできない。おそらく、両者が原因になっていると想像できる。

### (2) 儒教的労働観

儒教に関して言えば、既に述べたように日本では信徒の数は少ないが、それが日本人の精神構造に与えた影響力は、意外かもしれないが仏教よりも大きかったと言えよう。特に武士が社会を統治する地位を有する者の立場から、儒教の論理を用いた。人々の間での長幼の序の規定、男尊女卑、規律重視などの社会風習が、長い間日本社会を支配してきたことによってわかる。

労働に関して言えば、江戸時代に有名な石田梅岩は石門心学によって、士農工商の序列があった時代において、最下位の身分である商人に対して、商売による取引で利潤を得ることは恥じる行為ではなく、むしろ立派な商人哲学であると説いた。農業が生み出す製品は、人が生きていくために欠かせないものなので、江戸時代では農民を少なくとも身分上は商人よりも上位に置いていたが、商人も働くことの意義を感じるようにと、商哲学の重要さを説いたと見なしてよい。

### (3) 二宮尊徳

最後は二宮尊徳(金次郎)である。あまりにも有名な人物なので、記述は最小限にする。仏教や儒教といった教本とは関係なく、日本人の働き方に影響を与えた人である。あえて言えば、儒教倫理につながる思想とも理解できるが、国民に勤勉と儉約を説いた教えである。明治時代から第2次大戦前後までにかけて、多くの小学校において、薪を背負いながら書物を読む二宮金次郎の銅像が置かれたように、為政者の側から勤勉、儉約を理想とするようにと、庶民に諭す期待が込められていた。

そういう意味では、上から意図的に押しつけられた勤勉・儉約の意義という観があるので、私は二宮尊徳にさほど親近感を覚えない。尊徳自身の価値を過小評価する気はないが、政治的に利用されすぎたのが不幸であった。

むしろ私にとって意義深く思われるのは、西洋におけるマックス・ウェーバーと全く独立に、勤勉と儉約のもつ価値を二宮尊徳が賞賛した点にある。キリスト教の長い歴史と社会・経済の長い歴史を熟知していた学識の深いウェーバーと、小田原藩での藩士として財政のたて直しや農地育成、治山治水に従事していた、言わば役人という実務家が、東洋と西洋の別地域において独立に、ほぼ同じ思想に到達したことに感銘を覚える。

このように述べてくれば、学問の世界と実務の世界の双方から、勤勉と儉約の価値が賞賛されたということは、人類にとって勤勉と儉約は尊いことである、との理解がかなりの支持を得ている、

ということになる。

### Ⅲ まとめ

古代ギリシャから現代まで、働くということに対して、西洋と東洋の哲学思想がどのような主張をしてきたかを述べてきた。特に宗教との関係を強調したし、苦痛の伴うことの多い労働をどう哲人・経済学者が理解してきたかを議論した。

\*本稿は橘木俊詔著『働くということ——偉人はどう考えたか』、橘木俊詔編『働くことの意味』ミネルヴァ書房、2009年（第1章、pp.4-29）を大幅に短縮した上で、加筆・改訂を施したものである。引用を許可されたミネルヴァ書房に感謝する。

たちばなぎ・としあき 同志社大学経済学部教授。最近の主な著作に『学歴格差の経済学』（松浦司氏と共著、勁草書房、2009年）、『教育と格差』（八木匡氏と共著、日本評論社、2009年）、『女女格差』（東洋経済新報社、2008年）など。労働経済、公共経済専攻。